

自立を育くむ援助は可能か

坪井善明

カンボジア人には自立心がない？

カンボジア人は、アンコール王朝滅亡の15世紀の昔からUNTACの支援によるカンボジア王国の成立の現在に至るまで、約500年間、“当事者能力がない”、“すぐ他国に援助を求める依存体質の民族”など、根強い批判にさらされてきた。西隣りのタイ、東隣りのヴェトナムという両地域大国に蚕食され、また19世紀中葉には抵抗らしい抵抗もなくフランスに保護国化された。そして、フランス統治下の「仏領インドシナ」時代には、カンボジアの保護国においては下級官吏にはヴェトナム人が多く採用され、フランス人－ヴェトナム人－カンボジア人という上下の階層秩序がおのずと形成された。それゆえ、カンボジア人は“怠惰で無能”、“自立心がない”等、悪し様に言われてきた。

他方、1975年4月17日の“解放”後、一時は民族ナショナリズムの勝利を驚きの目で見られ肯定的評価を受けた。が、ポル・ポト派の残虐行為が明らかにされたあと、カンボジア人の“おとなしい仮面の下にひそむ残虐性”などが喧伝された。そして、二派連合の争いは、結局、国際社会の介入を得なければ解決できず、「当事者能力がない」一つの証明とされた。

だが、ある民族を自立心のない人々だと決めつけることができるのだろうか。

我々がここ5年間、様々なカンボジア人との密接なつき合いを通じて実感していることは、確実に自立心をもったカンボジア人は多数存在しているし、その精神をもって国づくり、人づくりに日々懸命に励んでいる、ということである。ではなぜ、カンボジアが自立できないのであろうか。一言でいえば、大国が自分たちの利益のためにカンボジアをほんろうし、カンボジア社会の中に大きな傷を与えて、強い依存体質をもつようになったこと、すぐ内部分裂をする傾向がある、等の自立を阻む負の構造を作り出した結果といえよう。それは現在でもなお「援助」に名をかりた外国からの働きかけ－単に政府だけでなく、NGOや個人のレベルも含めて－も、その負の構造を維持・強化もしくは再生産している面がないとは言えないのではないだろうか。我々自身の活動の反省もこめて、「自立を育くむ援助は可能か」というテーマをここで一緒に考えてみた。

自分の利益のためにカンボジアを利用する

「援助」の名を借りて行う行為の中で、一番見つけやすい偽善が、カンボジアを利用して利益をあげる行為である。あらゆる行為は、純粋に利他的な側面だけでなく、利己的な側面も含んでいる。たとえば、交易は「give and take」の関係であればこそ成立する。つまり相手にも利益になりまた自分のためにもなる、という双務的關係があって継続的な活動は保証される。「援助」も、善意から出た他者を助ける人道的行為のはずだが、その中には、いつの日か立場が逆転した時には助けてほしいという願望があったり、人道主義的行為をすることで行為者自身が誇りをもったり、

外交上の得点をかせぐ、という副次的効果を期待する面は否定できない。結果として相手のために本当に役立つ行為なら、それらの願望や副次的効果を期待することは許容範囲に入るであろう。だが、許しがたいのは、「援助」と言って、まったく相手の立場や状況を無視して不要な物資を送りつけて利潤をかせいだり、自分のやりたい放題をして帰る等の行為であろう。「与えー与えられる」という援助の構造からして、与える人の恣意がそのまま通るという場面が数多く発生する。「援助」の本来の意味に立ち戻って、あくまでも助けを必要とする人々の要望に応じた行為だけを行うことを、「援助者」は常に心がける必要があるし、第三者の監視機関はそれをチェックする必要がある。

善意の押しつけ

全然自分の利益を考えずに相手のことのみを考えて行っているはずの行為も、結果として相手の自立を阻むことになることがしばしばおきる。とくにカンボジアの場合、長年の混乱による人材の枯渇と劣悪な生活条件の中では、すべてを外部の者がやらなければいけない、と感じる場面が多い。政府機関は言うに及ばず、国際機関やNGOでも、短期間の調査に基づいて数々の青写真を自分流に仕立て上げ、その案をカンボジアに押しつけることになる。現在のカンボジア人にはできないし、またすべてをカンボジア側から依頼されたから、やむを得ずやっている、という認識である。だが、往々にしてこれらの「善意の押しつけ」は失敗に終わる。何故かと言えば、家や道路等のハードな「箱物」を建設することは、お金と技術がありさえすれば容易だが、それを維持し発展させるのは、現地の人々の理解と協力がなければできないからである。つまり、カンボジア人の心の底からの要求に耳を傾けていないし、その計画作成過程にカンボジア人の意見が反映されていないからである。どうせカンボジア人にはわかりっこない、出来っこない、我々が考え抜いた案こそベストでこれを批判するのはおこがましい、と考えるからである。どこかに傲慢さがあり、何よりも相手を尊重していない。

自立を育む援助とは

①現地に長期にかかわる人材

NGOで成功している例を見るとわかるように、まず5年、10年、20年の単位で長期に現地にかかわる人間が存在していることである。現地の人と信頼関係を築き、相手が心を開くのを待って、その意見に耳を傾けるという態度がすべての基礎になる。我々の「アンコール遺跡国際調査団」が、それなりの信頼を得て活動できるのは、団長の石澤良昭教授が、1961年以来30数年に及ぶカンボジアとの交流を続けていて、強固な信頼関係が確立されているからである。

②カンボジア人の主体性を認める

つぎに重要なことは、アプローチの仕方である。自分達のスケジュールや計画を押しつけるのか、あくまでもカンボジア人の主体性を尊重するのか、ということである。このことは、言うは易いが行うには非常に困難が伴う。というのも、現在カンボジア人の優秀な人材の数はきわめて少なく、国際協力のパートナーとしての理解力・判断力をもっている人は限られているからである。加えて、今を生きることに一所懸命で、短期的利益の獲得をめぐるカンボジア人同士での内部の分

裂・抗争はいたるところで起きている。一貫性のある政策を実施できる体制にはなっていないからである。中長期の展望をもつ“いい政策”も、即時的要求の波にのまれ、党派性がつき、私利私欲にからみとられてしまうことが多くて、結局、何もできないことになる。さらに、カンボジア人の多くは、上座部仏教の教えを深く信仰していて、表面的には柔和で不満をめったに口にしない。外国人に対してはよほど親しくならぬ限り、心を開いて本音を言わない。たとえば、短期間の滞在中、ブルドーザーのように仕事をする人間に対しては何も言わないが、「カンボジアにはカンボジアのやり方があり、カンボジアに来たらそのやり方に従うべきだ」と冷やかに見ているだけのことが多い、という。これでは心底からの協力が得られるはずがない。こういう受動的抵抗になお一層いらだって馬鹿にする、という悪循環に陥ってしまうことがよく起こる。

とくに、日本人は、カンボジア人協力者を働かせ過ぎる傾向があり、お金さえ払えばそれで相手も納得するはず、と一人で思い込んでいる。多くのカンボジア人が密かに、かつ強く「日本流の金権体質」に反発しているのを、我々はずっと自戒してよい。

③内在的理解の必要性

結局、相手の心を知ること、その民族の歴史や環境を理解すること、生活のリズムを尊重すること、言葉をわかること等、「現地を限りなく内部から知る」努力を課す以外に、自立を育くむ援助の方法はないように思われる。「援助」と言っても、予算消費型、効率重視の目標達成型、のやり方では、自立を育くむのではなく、かえって阻害する結果を生むことになると思われる。

寄り添って生活しながら、自立できる知識と技術を伝授すること。我々がその役割に徹し切れるか、またそういう援助体制を日本社会の中から構築することができるのか、我々自身に厳しく問われている。